# ひよくれんり

### もくじ

プロローグ ~大人になれない大人~	4
突然のお見合い	9
気になる人	26
二人の初デート	41
これが恋というものか	47
雨は歌う	58
プロポーズ大作戦	65
まさかの疑惑	86
異心転心	97
それは一種のテロリズム	114
外野の気持ちになってくれ	124
これは誰かの陰謀か?	146
最後はキスで締めましょう	157
意外過ぎた真実	177
さりげなく、告白	199
息を潜めて、微笑んで	223
傍にいさせて、抱きしめて	236
エピローグ~月も待たずに、キスをして~	276

## プロローグ 〜大人になれない大人〜

中学生になればお姉さんになれるって思っていた、 小学生の頃

高校生になれば。大学生になれば。

だけど成長するにつれ、思っていたほど大人になんてなれていない自分に首を傾げて。

でもこれってつまり、心は若いってことよね、 若く見られるのはいいことじゃん、 と開き直った

のは二十五歳を過ぎた辺りから。

おかしいな。二十歳を過ぎれば大人だって思っていたのは、 いつまでだったっけ?

法律的に、お酒を飲んでも許される歳ではある。

煙草だって、法律的には吸えるようになった。 (吸わないけど)

入ったことはないけど、レンタルショップのアダルトコーナーにだって入れる

職場には自分より年上のひとより、 年下の子が多くなって。

頼られるようにだってなってる。

それでも自分は本当に大人になれているのかな? って、 首を傾げてしまうのはどうしてだろ

になってから。 ああ、心が若いわけじゃないんだなって気付いたのは、 この頃。 二十八歳になって、三十路目前

私がいつまでも自分を『大人』と思えないのは、 なりきれていないからなんだ。 子供の頃想像していた『立派な大人』 ってやつ

私はいつ、あの頃思い描いていた『大人』 に、 なれるんだろう?

峰岸千鶴。二十八歳。独身。彼氏なし。

身長は百五十二センチ。体重は……言えないな。

髪は肩上くらいまで伸ばしている。 色素が薄いのは、 母親譲り。

現在、気ままな実家暮らし。父は商社勤め。母は専業主婦。弟は大学生。

職場は二駅先の街にある書店。とはいっても正社員じゃない。パート。

トのお給料でもやっていけるのは、 ひとえに実家暮らしだから。

だけど、

歳まで結婚する気配も無く、そもそも男の影も無いぐうたら娘に危機感を覚え始めたようで…… 初めこそ娘可愛さに実家暮らしを選んだ私を喜んで受け入れてくれていた両親も、

「早く出ていけ」とか、 「子供は若いうちに産んだ方が」なんて言われる。

実家暮らしは楽だけど……

嫌いじゃないけど……

触れられたくないところまでずかずかと入りこまれるから、 少しだけ居心地が悪い

この

て私を庇ってくれる弟は、 「彼氏はいないのか」「誰か良い人は」って、口癖みたいになっている両親。 いま大学のある街で一人暮らし中。 「人それぞれじゃん」 つ

味方はいない。

いませんよそん なの

良い人……ならいますよわんさかと。 好きな人ならいっぱいいるの。 ちゃんと。

心はときめいてるよ。常に。

ただし……

私とは、違う次元の人達だけど……

私の好きな人は……この画面や紙の向こうにたーくさん。

俗に言う、オタクってやつなんで。

彼氏って存在がいたのは、 いつ頃だったっけ?

ああ、あれは……まだ私がオタクを必死に隠してた中学生の頃

どうして好意を寄せられたのか全くわからなかったけど、隣のクラスの男の子に 「好きだ」 って

て、 思わず「うん」って言ってしまった。

当時ハマッてた、 漫画のキャラと同じテニス部でドキドキしたっけ

でも付き合うって、 具体的に何をするのか当時の私はさっぱりわからなくて。

て忙しくて。 休みの日は朝からアニメを見てゲームをして漫画を読んで(ときにはイベントにも参加して)っ 一緒に帰って周りに難したてられるのが怖くて、学校では付き合ってるってことを内緒にしてた。

ケータイもメールも普及していなかったあの頃。 男の子がそっけなさすぎる私を見限るのにそう

時間はかからなかった。

と、よりいっそう盛り上がるものなのだ。この病は…… 趣味にのめり込んでいった。ちょうど、同じ趣味の友達が増え始めたこともあってさ。 そんなほろ苦くも淡い恋 (と呼ぶのもおこがましい気がするけど) を経て、 私はますます自分の 仲間がいる

中学、高校はオタク一色の青春時代だったなあ。

た瞬間 がいたりして。 でもあの頃はあの頃なりに、オタクライフを満喫していた。ある意味、あれだって輝ける青春だよね。 高校を卒業してからも、「大学に入って環境も変わればオタクから抜け出せるのかな?」って思っ いま思うと、花の青春時代になにやってんだ! (ええ、瞬間ですよ)もあったけど、私の専攻した学科の同級生の中にはよりコアな同志達 (非オタクの意) には大声で言えない青春だけどさ。同人誌制作のために完徽、 って、 当時の私を叱責してやりたくなるけど。

抜け出すどころか、ますます深みにハマっていった。

もうね。二次元の男以上に私の胸を熱くさせる現実の男なんて、 せいぜい二・五次元なんて呼ばれる俳優さん(ミュージカルとかのね!) いないのですよ。 や声優さん達くらい

より私の胸を熱くさせるのは……

「はあ……。 やっぱいいなあ、 ヘタレ攻め×誘い受け」

男×男。

いわゆる、 『やおい』 つ てヤツ。

そう、私……オタクで、 腐女子なんです。

## 突然のお見合い

それは五月の初旬。

世間が大型連休にやれ帰省だレジャーだと盛り上がっていたときのこと。

はまた大量の入荷をさばかなきゃいけないから、 続いたり……)があって、お客様からの問い合わせや欠品のチェックや補充に大忙し。 ゴールデンウィークはお店の繁忙期で、 おまけに連休中は入荷の変動(前倒しや入荷の無い日が 大変大変。 連休明けに

かく数が多い。だからけっこう、 て本好きな文系イメージがあると思うんだけど(実際そういう人もいるけど)、本は重いし、 本屋の仕事は意外に重労働だったりする。本屋の店員さんって、なんとなくこう……大人しくっ 肉体労働が多いのだ。

それにいろんなお客さんが来るから、ストレスも溜まる。

かるでしょ!」って、言われたことがあったなあ……。 んですか、 る人もいて……。一度、「昨日新聞に載ってたあれよ、 中には、 タイトルともつかないうろおぼえなキーワードだけで本を探せと、 そしてそれに載ってる本の広告どれだけあると思ってるんですか……とは言えず、 あれ!」とすごい剣幕で「本屋さんならわ いやいや、新聞だけで何紙あると思ってる 無理難題を言ってく

にキーワードを聞き出したりしたけど結局……

ま、まあとにかく。大変なんだ、本屋の仕事は。そして薄給。

労働内容のわりに、時給は安い。

それでも本屋で働いているのは、 やっぱり好きなものに囲まれていられるから。

仕事なんてものは何を選んでも大体大変なんだから、 せめて好きなものに携わっていたいと思っ

たのだ。そして、 本屋で働けば社割で本が買える! これ、重要。

てしまっている。うう……だって読みたいんだもの。そしてすぐ手の届く所にあるんだもの。 私の出費の大半を占める本の購入代を、 本屋で働いているとついつい新しい本に目移りしちゃって、 少しでも浮かせられるんだから文句は言えないでしょう。 結果、 前よりたくさん本を買っ

だから気になる本は、とりあえず取り置きしてしまうんです……

紙袋を手に家に帰った私。 そして今日も今日とて、 ああ……この重みが幸せだぁ…… 取り置きしていた漫画と帰り際に一目惚れしちゃった本を買って、 い

ふふふ。今日の夕飯はなんだろうなぁ·····? お腹が空いたなあ。 お肉が食べたい。

そんな願いが通じたのか、夕飯には肉が出た。

母手作りの豚の生姜焼きを食べて、食後にゴルフ帰りの父が買ってきた柏餅を食べながら、 買っ

たばかりの漫画を読む。

思う。 大人買いして良かった……! 幸せ。 一度も読んだことの無い漫画を一巻からまとめ読みするのって、 これ、 面白いよう! すっごく幸せだと

それに柏餅! 熱々の日本茶に合うー! うましー

なんて、にやにやしながら漫画を読んでいたら、唐突に母が口を開いた。

「ねえ千鶴。あんた、次の土曜は休みだったわよね?」

「んー。そうだよ」

いまのところはなんの予定も無い、連休翌週の土曜日。

好きなだけ寝倒して、 積んでたゲームを消化しようっと。 むるる。

「ちょうど良かった。その日、お見合いすることになったから」

え ?

オ、オミアイ?なんだそれ。

「お、お母様?いま、なんて」

うちの母、 専業主婦の朱鷺子さんはお茶をすすりながら、 しれっとのたまう。

よ~って姉さんに愚痴ったら、『ちょうどいい話があるのよ!』ってね」 「だから、 お見合いよ。 あんたの。いつまでたってもぐうたらして、結婚する気配が微塵もないの

「当たり前でしょう? いま言ったもの」 「はあ!! なんで勝手に決めるの!! 聞いてないよそんなの!!」

うぐっ」

ああ言えばこう言う。

ありえないでしょ、こんな漫画みたいな展開!!

「お見合いしたいなんて言ったことないよ!!」

「言ってたらもっと早く紹介してもらってたわよ。 まったくあんたはほんとに腰の重い……」

「私、結婚する気なんて……」

「おだまりなさい」

キラリ、と母の目が光った気がした。

「あんた、もうすぐ三十なのよ?」

「……いまどき、三十過ぎても独身の女の人なんていっぱいいるし」

現に、私の周りの友人達は圧倒的に独身が多い。

だから、私もそんなに焦らずにいられたんだよなあ……

「いつまでも親のすねかじって、どうするつもりなの」

「うぐぐ……」

親のすねかじり。そこをつかれると痛い。

ちょっと怪しい……。少なくとも、いまのように趣味にお金を掛ける余裕は無くなるだろう。 一応生活費は入れているけれど、 実家を出て一人で生きていける収入を得ているのかというと、

「いまはいいわよ。お父さんも元気だもの。 でも、私達はあんたより先に死ぬの。 あんた、

ままの収入で、独りで生きていけると思ってるの?」

------j----

「……なにも、 今回の人とすぐに結婚しろって言うんじゃないのよ。まずは会ってみなさい」

「……はい」

なにも言えなかった。

母の言う通り。ずっと見ないふりをしてたけど、 いつまでもいまのままではいられない んだって、

わかってた。

私はちっとも大人になんてなれてない。

独りで生きていく収入も、力もない。

いまはいいけど、いつか両親を亡くして、 独りで生きていけるのかって。

いまのような生活を、続けていけるのかって。

先を想像するのが怖くて、逃げていた。

漫画やゲーム、アニメの世界はそんな不安を忘れさせてくれる。

私は逃げていたんだ。二次元が見せてくれる幸せな世界に。

だけど、 昔のようにずっとその世界に溺れたままではいられない……

だって、私は……

心は未熟でも、 社会的にも肉体的にも、 大人と呼ばれる歳に、 十分なってしまっているから。

(……だからって結婚に逃げようとするとか……。 私はほんとにダメだなぁ……)

母に突然見合いの話を告げられた翌週

ろうけど)、某ホテルのレストランに来ている。 私はこの歳で着るにはちょっと恥ずかしい振袖に身を包み(いや独身なんだから着ても良い

別に、こんな振袖じゃなくてワンピースとかで良いじゃんって、 言ったんだけど……

『せっかく買ったのに、あんた一回しか袖通してないじゃない!』

と、母の雷が落ちまして……

まあね。 成人式のときに着たっきりだもんね。 確かにもったいない

たしな……。 当時は、 まあ友達の結婚式とかで着るよ~とか言ってたんだけど、 (中学の頃の友達の結婚式によばれたときは、 遠方だったから着替えやすいドレスで そんな機会は巡ってこなかっ

でもこう、 いかにも『ザ・お見合い!!』って感じで……

参列したし)

は、恥ずかしいよう……

私の隣には、同じく着物を着た母・朱鷺子。

母の向かいには、 これまた着物姿の伯母・亜美。

そして私の向かいには……

私のお見合い相手……の人……が

いらっしゃったんですけれども!

-.....で、こちらが柏木正宗さん。高校の先生をやってらっしゃるのよ」

まじかよおおおおおおお

私は内心ばつくばくだった。

だろぉと、 だって、 どうせ三十過ぎて見合いに来るような男なんて、いままで女に縁の無かった冴えない男 私は高を括っていたのだ。むしろ嘗めていたと言っても良い。(偏見いけない!)

くらいなのに。 いしちゃったよ! 乙!」なんて、自虐っぽいネタに使えるなこれ、 だから、見合いをすることは了承したものの、どうせうまくいくわけないからとりあえず「見合 ブログに書くか、 と思ってた

なのに、 なんで……

「……こんにちは。柏木正宗と申します」

なんで見合い相手が、 イケメンなんだよおおおお!!

百八十センチはありそうな高身長。仕立ての良いスーツに包まれた体は細身で、 でも程よく引き

艶のある黒髪をすっと後ろに流し、締まっていそう。 切れ長の瞳に筋の通った鼻梁

絶対リア充だろこの人!!しかも眼鏡かけてるううううう!!

二次元ならモロ好み。ストライクど真ん中な外見(黒髪眼鏡)

「……はじめまして。峰岸千鶴です」

私はなんとか、接客で培ったよそ行きボイスで挨拶をした。

しかし内心は焦りまくっている。

だっておかしい。 おかしいよ。

の三十男が目の前に!!

び放題だろ!! なんでこんなイケメンが見合いなんてしてるの!! こんな外見をお持ちなら女なんてそれこそ選

ええと、柏木正宗さん。

職業、私立高校教師。 専門は日本史。 三十歳独身で、 結婚歷 なし。

ご両親はすでに他界していて、 現在は亡きお祖父さんから譲られた一軒家で独り暮らし。

趣味は読書……って。

今回のお見合いは突然だったから、 お互いの釣書きなんて用意されてなくて。

代わりに紹介者である伯母さんが、柏木さんのプロフィールを事前に教えてくれていた。

プロフィールだけ見ると、かなり理想的な人だよこの人。

収入は安定しているし、 同居なしで一戸建て付き。 しかも同じ趣味!

おまけにこのルックス……

これだけ良い条件が揃ってて彼女がいないなんて、 言っちゃ悪いが何か問題でもあるんじゃな

そうじゃなかったら、 神様が気まぐれでも起こして、 私に一生に一度あるかないかの幸運をくれ

たとしか思えない。

まさかね……)

そんなにうまくいくわけないと、 私は一笑する。

ここに来るまでは「会うだけ。 結婚はまだしない」なんて言っていたくせに、 いざ見合い相手が

イケメンで理想的な人だとわかった途端に「してもいいかも」なんて思う打算的な自分に嫌気が差

きっと、柏木さんは「付き合いで断れなかった」とかなんだ。

本気で見合いする気なんてないんだろう。

(あー、まあ……)

理想のイケメンを間近に見れて良かったな、 と思おう。 今回は。

「……………」

しかし……見れば見るほど、 素敵な眼鏡……

こう、くいっと眼鏡を押し上げてくれないかなあ……。 ちなみに私はツルをくい っ、よりもブリッ

ジをくいっ、 に萌える。

なんて、 思わず柏木さんに見入っていたらブリッジをくいっとしてくれた。

おお……眼福。 そうか、 柏木さんはブリッジくい派かぁ…

いいよなあ、眼鏡男子……。はあ~目が幸せ……

····?

柏木さんが訝しげな視線をよこしたので、 おおっとやばい見過ぎたか、 と慌てて愛想笑いする私

愛想笑いは仕事で慣れているのだ。

そうこうしているうちに、私達のテーブルに料理が運ばれてくる。

ちょうどお昼時だから、 メニューはランチコースだ。 実は、 ここのコース料理密かに楽しみに

こればっかりは、お見合い様々だなと思う。 美味しいって評判だけど、私には敷居が高くてちょっと……

芸術的に盛り付けられた前菜のサラダをぱくり。 う、

なんだこれ!!

野菜自体が美味しいのはもちろんだけど、このドレッシングがうまー!!

たまにはいいかな」なんて思ったりした。美味しいものもタダで食べられるし。 -このときの私は、眼鏡男子と美味しいコース料理に浮かれていて、「こういう見合いならまあ

そう、このときの私は……

柏木さんと会うのはどうせこれっきりだろうと、 思っていたのだ。

お見合いランチの締め。

最後に運ばれてきたデザートは、 プレートに綺麗に盛り付けられたアイスクリームとチョコレー

で買って帰ろうかなと思った。二人とも甘党なのだ。ここ、持ち帰り用にケーキ売ってるみたいだし。 すっごく美味しかったから、 父と弟(見合いすることを伝えたらなぜか帰って来た)に、 お 土 産 げ

「それじゃあ、

あとは若い二人で」

おおっと危ない。せっかくの紅茶を噴き出すところだったぜ……

『あとは若い二人で』なんて。そんなセリフ、ドラマの中だけだと思ってたよ、

母と伯母は二人でにこにこと立ち上がって、 あとには私と柏木さんが取り残される。

若い二人でって、言われてもな……

何をすればいいのか、わかんないんだけど。

しましょうか……」

ここで話をするか。それとも定番通り、二人で庭でも散策するか。

選択権を相手に委ねると、柏木さんは少し考えたあと……

庭に出ますか……」

二人で庭を見に行くことにした。

さりげなく私の椅子を引いてくれて、 おお……! 出来た人だなあって思う。

さすがに初対面だから、手を繋いだりはしなかったけど。(というかそんなことできないけどね!) これまたさりげなく、草履で歩きにくい私に歩調を合わせてくれるあたり、 優しい人なんだ

なぁ……って思う。 ここのホテルの庭は、 日本庭園。五月のいまは、 躑躅が花の盛りを迎えている。

人工の滝もあって、池には錦鯉が泳いでいた。 弟と二人で公園の鯉にパンくずをやったっけなあ……

口がぱくぱく動くのが面白くて。 いたずらで小石を投げると、 鯉はぱくんと呑み込むんだけ

少し声が裏返ってしまった。は、 撰組にハマったわけですよ。 国志も大好きだ!! 本史が専門って言ってたし、 「……そうですか」 「……鯉がお好きなんですか?」 「うはいっ!!」 「……峰岸さんは」 五月の、 ちょうど、「三国志好きですか」をどう上手く切り出すか考えていたところに先手を打たれて、 それなら、 男の人って、戦国や幕末、 時代物……。高校時代、司馬遼太郎にハマったっけなあ……。 でも、 やっぱり、 緑が一番、青々と輝く季節。 私が錦鯉を見ていると、柏木さんも立ち止まって池を見る。 鯉に対する思い入れはそんなものだけど、 いやしかし。趣味って、 洋風の庭も良いけど、 ああ、綺麗だなって。 二人無言で、池を見つめる。 イエスかノーで言うならまあイエス。 すぐにぽよっと吐き出すのがまた面白くて、 そういえば趣味は読書、 -って、 なにを喋ったらいいんだろうな……。定石通り、 温かい陽射しに涼しげな風が吹き抜けていく庭。 語り合える。 会話した方がいいんだろうか。 しばらくぼうっとしていたけど。 こう……凪いだ気持ちになれる。 日本庭園も好きだ。 もうお互いわかってるしなあ…… (ただし熱く語りすぎて内容的に引かれるかもしれないが!) 新撰組、 三国志好きが多いって言うし…… やっぱり時代物とか歴史物が好きなのかなぁ…… ってことだったけど、柏木さんはどんな本を読むんだろう……。 恥ずかしい…… それに戦国武将はオタク女子の大好物ですよ。 予想外の質問に思わず「はい」と答えてしまう。 ずっと見てたっけ。 「ご趣味は?」とかか……? そしてそのまま転がるように新

日

ちなみに、

突然のお見合い

続かねー!! 会話、 続かねーよどうしよう!

どうしよう、これ私も「柏木さんも鯉、お好きですか?」って聞くべき? 聞くべきなのか?

でも、それって「こいつどんだけ鯉好きなん?」ってならないか。

結婚相手の条件は「鯉が好きな男性です」ってか! うわー!!

いなら、 に考えれば、 私は人生初の見合い! なんでもいいからうまいこと話しかけて話題を振ればいいんだって。 他に話題が無いから聞いたんだってことくらい、わかるだろうに。こっちも話題がな しかも相手はイケメン!という非常事態に思考が暴走していた。 それだけだって。 普通

わかってはいる……だけど……

でも、言葉が出ないんだよー!! 何言っていいかわかんないんだよー!!

「……すみません」

「うえつ!!」

独りでテンパっていると、 傍らにいる柏木さんが突然謝り始めた。

ええええなんで!?

「……俺はどうも、 口下手で……」

いや。良いじゃないですか無口キャラ。 (あ、 キャラって言っちゃった)

眼鏡で無口な男子は萌……いや、 素敵!! だと思うの!!

-----え、 ك.....

「……退屈な思いを、 させてしまう」

私は年甲斐もなく、「たいくつ?」 きょとんと首を傾げる。 そんなんしても可愛くねーよ! ೬ もう一人の自

分がツッコんだ気がしたがまあいいや。

ええと……。たいくつ……。退屈?

いやいや退屈って! そんなの緊張のあまり感じる余裕もないっすよ

理想の美形が隣にいるんですよ??

むしろ謝るのはこっちですよ! うまく場を盛り上げられなくてすみません!!

「そんなことないです!!」

思っていたよりも大きな声が出て、 自分でもびっくりした。

柏木さんも、びっくりした顔で私を見ている。

「ああああいやあの。 私もそんなに口が上手い方じゃなくてですね」

「私の方こそ、退屈させてしまうと言いますか」

「いや、そんなことは」

いやいやいや!

そんなことありますって!!

でも……

「でも、 無理して話さなくてもですね

ああもう! 何を言いたいのかわけわからん。

「その、 無理して話そうとしなくても……」

24

あああ同じこと言ってる……-

で、でもですね……

ええと。 つまり。

私が言いたいのはですね。

「無理して話そうとしなくても……。 会話が無くたって、無言のままだって、居心地が悪いわけじゃ

ない……です」

話をしなくても。

ぼうっと、風景を見つめて。

無言のままでも、 全然気まずくなくて。

むしろ、話さなくちゃと意識した途端に焦って。どうしようどうしようってなったから……です

「柏木さんといるのは、 退屈じゃありません。

お、落ち着き……ます」

ええと・・・・・。

つまり

心臓はどっきどきだけどね!!

「峰岸さん……」

ああ、どうしてもっと上手いこと言えない んだろうな私

そんな自己嫌悪に陥って、 これはうまくいかないパターンだやっぱり、 なんて思っていたから。

戻り際、

「これ、連絡先です……」

なんて、名刺を渡されて。 (裏にケータイ番号とメアドが書かれてた)

「……よかったら、 今度映画でも見に行きませんか」

って、誘われたときは思わず「これなんの死亡フラグ?」って叫びそうになった。

25

これが私達の、 最初の出会い。

突然のお見合い

### メスになる人

26

見合いの日から三日後の午後。

受け持ちの授業の無い時間帯。 俺は自分のデスクのある社会科準備室で一人コーヒーを飲みなが

ら、携帯を開く。

メールの着信は無い。

とっさに見合い相手の峰岸千鶴さんにこの携帯の電話番号とメー ルアドレスを書い

たのだが、それから彼女からの連絡は無かった。

見合いの世話人である、 保坂亜実さんからも何の連絡も無い。 これは…… 『脈なし』

だろうか。

「まっさむーねセンセ! コーヒーおくれー!!」

がらっ!!と扉が開く。

入って来たのは白衣姿の男。この学校の養護教諭だ。

他の先生方がいないから、まだいいものの……

入室の前には、ノックをするのが礼儀だろう。

これでは生徒達に示しがつかないじゃないか。

そう思ってはいるものの、この男には言っても無駄だとわかっているから、俺は何も言わない。 日頃俺を「正宗」と呼び捨てにする幸村が、職場で「正宗センセ」と呼ぶようになるまで、

言い直させたことか。(ちゃんと『先生』と言えと注意したのだが、直らなかった)

そのくせ父兄や来客の前では、 きっちり「柏木先生」と呼ぶのだから、普段のこれはわざとなの

そんな幸村とは、 中学からの付き合いだ。ちなみに、二人ともこの高校の出身である

幸村は、 明るい茶色の髪を首の後ろで一つに縛っている。この学園は自由な校風で、 生徒教職員

ともに染髪や長髪が容認されている。でなければ、 コイツのこの髪型はアウトだろう。

幸村は、人懐っこい容貌の男だ。いつもにこにこと、 口元が笑んでいる。

みを聞くことも多い養護教諭としては、 その見た目通り人懐っこく人好きのする幸村は、男女問わず生徒からの人気が高い。 慕われるのは良いことなのだろうが…… 生徒達の悩

「ふっふーん。俺、正宗センセのコーヒー好き」

好きだと言われても、コーヒーメーカーが作るコーヒー は誰が作っても同じ味だ。

それに砂糖を二つ入れて渡してやれば、 「わかってるぅー」と奴は言う。

反応がいちいちうるさい。

……幸村先生。仕事は……?」

んー。ちょっと休憩中」

大丈夫大丈夫、とカラカラ笑って、幸村はコーヒーを受け取る。

28

大丈夫って、その間に具合を悪くした生徒が来たらどうするつもりだ……と、俺の眉間に皺が寄っ

ているのに気付いた幸村が、慌てた様子で首を横に振る。

ちがう。ごめんなさい冗談です。 その帰り」 いまはね、 保健室にサボりにきた奴に留守番任せてんの。

俺は職員室に用があって、

····・・・・そうか」

サボりは褒められたことではないが

たまに休みたくなる気持ちは、 わからないでもない

あまりにひどいようなら、幸村だって対処するだろう。

ところでさ、聞いたよ正宗センセ。見合いしたんだって?」

「ブフッ」

幸村の言葉に、 口に含んでいたコーヒーを噴き出してしまう。

幸い、噴き出したのがカップの中だったから良かったようなもの 0)

これはもう飲めないな。

無言で流しに立ち、カップを洗い始める俺にさらに幸村は言う。

学園長に聞いちゃった~! なんでも、 学園長の知り合いの姪御さん、 なんだって?」

Г······

相変わらず、 口が軽い。

「学園長、自分が仲人やりたいばっかりに、『自分のトコの、若くて顔のイそもそも、今回の見合いのきっかけはこの学園長なのだ。 イ奴を紹介するから誰

かいいお嬢さんはいないか?』なんて、 探し回ってたらしいじゃん」

そうなのだ。

しかもその理由がくだらない

知り合いの学校経営者が、ある教師の世話役を務めたらしい。 その後二人は結婚に至り、

人として結婚式に出席した。

『それはそれは立派な式だった。さすが自分が結び付けた二人だ』と自慢されたらし い学園

「だったら、自分も!」と発起したらしい。

「で、俺か正宗センセのどっちかで悩んでたらしいけど……」

そう。学園長は、 この学園で二人しかいない独身者であるうちの俺か幸村かで悩み、 結局俺を選

んだのだった。

情報保護法違反で訴えたら勝てるぞ)、 さすがに釣書きを作る時間は無かったらしいが、 俺の所には、 俺のプロフィールを勝手に相手方に伝え 相手のプロフィールと共に事の次第が伝えら

『二十八歳の娘さんでね、 趣味は読書で本屋に勤めているっていうし、 柏木君にぴったりだと思う

30

挙句、『もう向こうにも話がいってるんだよ。頼む!

詩が、『もう向こうにも話がいってるんだよ。頼む!
まったく、寝耳に水とはこのことだと、俺は思った。 私の顔を立てると思って……』

そう頭を下げられては断れない。

ことにした。 それに、すでに相手に話がいっているのに断るのは失礼かと思って、 仕方なく見合いの場に行く

結婚……か。願望がまったく無いわけではなかったのだ。

高校時代に両親を亡くし、そのとき俺を引き取ってくれた祖父も大学在学中に亡くなって……

以来、祖父の残してくれた一軒家で一人暮らししている俺は、 たぶん温かい家庭というものに憧

れを感じている。

在りし日の、父と母のように

お互いを尊敬し合い、支え合えるような人と結婚できたら……と。

しかし、 俺は生来の口下手が災いして、 恋人と長く続いたことがない。

利いたことを言えない俺に、大抵の女性は愛想を尽かして離れていった。 まして、忙しいこの職業……。 恋人のために割ける時間が少なく、 たまのデー

面白味の無い人間だ、という自覚もある。

探したりしたい……と思っている俺の方に、 正直、恋人とデートするよりも空いた時間はたまっている本を読んだり、 別れの原因がある。 授業に使える参考書を

# 同業者なら、と思ったことはあるが……

もなかなかない この学園には独身の女性教師がいない。 私立校ゆえに新規採用はほとんどないから新しい出会

意識しているだろうし)……という気持ちも少しだけあって、学園長の話を了承した。 だから、 見合いで相手を探した方がスムーズに結婚できるかもしれない (相手も最初から結婚を

俺のトコに話持ってこられても、 断ってたけど~」

幸村には、人には言えない恋人がいる。

の他に知っている者はいない。 その恋人は生徒ではないが、 周りに知られると少し困ったことになる相手だから、 この学園で俺

本人も言っているように、もし学園長が今回の話を幸村に持っていっていたら……

一刀両断だったろう。

「で、ど~だったの? 正宗センセ」

見合い相手、可愛かった? 幸村にそう聞かれて、 俺はあの日のことを思い返した。

のテーブルには、 指定されたホテルで待っていた、 着物姿の二人の女性がついていた。 学園長の知人・保坂亜実さんに案内されて向かったレストラン

見合い相手の峰岸千鶴さんと、 その母親の朱鷺子さん

「はじめまして。 峰岸千鶴です」

緊張しているのか、少し強張った顔で言う彼女は、聞いていた歳よりもずっと若く見える人だっ 小柄な体つきのせいなのか。大きな瞳が印象的な童顔のせいなのか。

32

年配の女性二人が「あら、美味しいわねえ」「本当ね」と楽しげに食べ進む中、 お互いに口数の少ない見合いの席で、彼女の表情が和らいだのは、料理が運ばれて来てからだった。 彼女は無言のま

までぱくぱくと料理を口に運んでいく。

しかし、 目は口ほどに物を言う……というが。

彼女の目はキラキラと輝いていて、 料理を口に含んだ瞬間幸せそうに緩む表情がとても印象に

残った。

美味しそうにものを食べる人だな、

その後、二人きりになって庭に出ることにしたのだが……

俺は、まるで猫のようにじっと池を見つめている彼女の横顔から、 目が離せなかった。

彼女の表情は、 面白いほどくるくる変わる。

最初の、 緊張した表情。

料理を食べているときの、幸せそうな顔

そして、 いまは池を見ながら何か考えているのか、 難しそうな顔をしたり、 気持ち良さげに目を

細めたり……かと思いきや「はっ」と目を見開いて何か思いついたような顔をする。

そんな風に、 景色ではなく峰岸さんを見ていたら……

ふいに、 不安が過った。

彼女は、 俺がずっと黙ったままで気分を害してはいないだろうか、

いままで付き合ってきた女性達にさんざん言われてきた、「どうして黙ってるの?」「話すことも

無いってこと?」「機嫌悪いの?」という言葉が思い返される。

女性にとって、 無口な男は不快らしい。 まして彼女とは初対面なのだ。

話をしないとまずいよな。

俺の方から声を掛けるべき……なのだろう。

そう思って、ようやく掛けた言葉が「……鯉がお好きなんですか?」 で。 あれは我ながら、

けなことを聞いてしまったと思った。

案の定、 峰岸さんはびっくりした顔で、 「は、 はい」と答えた。

そして、 互いに無言のまま気まずい雰囲気になり……

俺は、やってしまったと思った。

どうして幸村のように、愛想良くふるまえないのだろう……

しかし、相手を退屈させてしまう悪癖を謝罪する俺に、 峰岸さんは

「そんなことないです!!」

と、小柄な彼女から発せられたとは思えない程の大きな声で否定してくれた。

「ああああいやあの。 私もそんなに口が上手い方じゃなくてですね」

私の方こそ、 退屈させてしまうと言いますか」

「いや、そんなことは」

無い、と思う。

彼女は、 なんというか

見ているだけで、面白いと思う。

「でも、無理して話さなくてもですね」

峰岸千鶴さんは、 言いたいことを上手く伝えられなくてもどかしい、 といった風にたどたどしく

言葉を紡ぎながら、必死な様子で言った。

「その、無理して話そうとしなくても……」

て、 彼女の言った言葉は……

「無理して話そうとしなくても……。 会話が無くたって、無言のままだって、居心地が悪いわけじゃ

ない……です。柏木さんといるのは、退屈じゃありません。お、 落ち着き……ます」

この場をセッティングしてくれた学園長に、 素直に感謝したいと思うほどに俺の心に響いた。

この人となら、もしかしたら……

そう思った俺は去り際に、

連絡先です……」

日頃持ち歩いている名刺の裏に連絡先を書いて渡したのだが……

もしかして、あれがまずかったのだろうか。

こういうことは世話人を通して申し出ないとまずいのか……?

「正宗センセ? おーい……」

しかし、 世話人を通したら峰岸さんも断りにくいかもしれない

かといって、初対面の女性から携帯番号やメールアドレスを聞き出すのも……

おーい……ねえ、 おいってば。 正宗!!」

「つ!!」

幸村に呼ばれて、 はっと我に返る。ずいぶん長い間、 思いふけっていたようだ。

手に持っていたカップは水ですっかり綺麗に洗われていた。 蛇口は無意識のうちに締めていたら

ヒーを注ぎ入れる。

俺はため息を一つ零すと、傍にあった布巾でカップを軽く拭き、コーヒーメーカー

から新しいコ

-.....悪い。ぼうっとしてた\_

「んー。別に良いけど。 で? どんなコだったの?」

-.....それは」

峰岸千鶴さん……は。

「……可愛らしい、 人だったよ」

幼さの残る風貌。

キラキラと輝く瞳

そして、 くるくると変わる表情

彼女からの連絡が無いかと気になっ て、 休み時間の度に、 携帯をチェックしてしまうくらいには。

俺は、彼女のことを意識していた。

「ふーん。

うまくいくといいね」

だと、 いいんだが……

しかして、その日の夜

寝る前に確認した携帯には、 一通のメー ルが届いていた。

件名には、 『峰岸千鶴です』 の文字。

そして本文には、 連絡が遅れたことを謝罪する一文と、 彼女のメールアドレスと携帯番号が書か

れていた。

それを見た俺は……

思わず、拳をぎゅっと握り締めていた。

\*

やっちまった……」

お見合いから三日後の夜。

峰岸千鶴は自室のベッドの上で携帯を握り締めて呟いた。

メール……送っちまったあああああ!!

あのお見合いの日、柏木さんから名刺を渡されて以来、 ずっと私は悩んでいたのだ。

連絡すべきだろうか……と。

するとしたら、

いやしかし、電話だと相手の都合がわからないし……。 (というか、 電話で話す勇気がないだけ

なんですが!!)

かといって、 何と打ったらいい のかわからないし……

それに、 いつ送ればいいの……?

朝だと「こいつはりきってる」と思われるかもしれないし……

日中は……仕事してないのか暇なのか、 とか思われるかな……

昼休みを狙うにしても……。そもそも、

先生の昼休みって生徒と同じ……でい

いんだよね。

あれ? 高校の昼休みって十二時だっけ? 一時?

あああもう覚えてない! それに学校によって違ったりするのかなあ。

夜っていう手もあるけど、 あんまり遅いと迷惑じゃ……。 って

もおおおおお!! わかんない!! わかんないよ!!

めようと電話したら…… いかん……。手に負えん……!! と、 泣く泣く、 友人に事の次第を伝えてアドバイスを求

38

『それ、なんて乙女ゲー? 攻略サイト見ろよ』

って言いやがるしいいいいいい!

失礼な!! これはゲームじゃねえよ、信じられないけど現実だよ、リアルだよ!!

ゲームだったら迷わず『電話』するよおおお!

電話して、デートの約束取りつけて、 相手好みの服を着て、待ち合わせの場所に行って、

男に絡まれて、そこに相手が助けに入ってくれて「遅れてごめん」って言われるよおおお"

あ、なんか泣けてきた……

本当にね、リアルな恋愛にはまったく免疫が無いよ、私……

ああ、現実の恋愛にも攻略本があればいいのに……

そんなことを思いながら、 何度も何度も本文を打ち込んでは消し、 を繰り返して。

最後は、 『もうどうにでもなれ!』って気持ちになってしまって、 メールの本文はかなりシンプ

ルな内容になった。

件名に、自分の名前。 (だって柏木さん私のアドレス知らないから、件名で名乗っとかないと……)

本文には、 『連絡が遅れてごめんなさい。 私のアドレスと、 携帯番号です』って一文を添えて、

自分のメアドと携帯番号を……って。ああああ!!

「私、馬鹿じゃないか!!」

しかも、私のアドレスには好きなキャラの名前が入ってるううう! アドレスなんかわざわざ本文に書かなくても、 そのまま送信元のメアドを登録すれば済む話だ!!

「うあああああ! 恥ずかしいいいい!」

『送信しました』の画面のままの携帯を握りしめて、 ベッドの上でのたうちまわる私。

メアド変えておけばよかったああああああああ!!

そこまで気にしないよね……。それに、あんまり知られてない作品のキャラだし……

だ、大丈夫……だよ、ね……?

うあああああああま! もう!! 三次元の男の人と接するのって、 ものすっごく疲れる!

私に回復アイテムを‼ プリーズ‼

と、ごろんばたんしていたら、 携帯からキャラクターソング、 略してキャラソンが鳴り始め、

メールの着信を伝えてくれる。

「ふおっ!!」

慌てて受信箱を確認すると『柏木正宗です』の文字。

\_.....つ」

へ、返信来たつ。

『メール、ありがとうございます。嬉しいです。

峰岸さんは、映画はお好きですか?

もし良かったら、今度の日曜に一緒に観に行きませんか?』

……つ。い。行きます。う…」

その後も私は、何度ものたうち回りながら頭をフル回転させてメールのやりとりをして、初デー

トってやつに臨むことになりました。

ああっ、服……!! 初デートまで、あと一週間もないよ……!!

どんな格好していけばいいのおおおおお!!

## 二人の初デート

あのメールのやりとりからあっという間に時は過ぎて、 とうとうデート当日を迎えました。

職場は忙しいんだけど、 同僚が「初デートなんでしょ! 頑張って来いよ!」と快くシ

フトを代わってくれました。

ありがたい……けど。

やっぱり緊張するよー!! うあー!! ドキが胸々……じゃない。 胸がドキドキするより

デートの場所は、映画館。

これから公開される映画の予告編が流れている劇場内で、 私の隣にはお見合いで知り合った黒髪

眼鏡のイケメン高校教師、柏木正宗さんが座っている。

うう……三次元の男の人とデートなんて、ぶっちゃけ初めてですッ!!

でも、幸いと申しますか……

映画で良かった!! 少なくとも上映中は無言でいられるもんねっ!! 無理に会話しようとしなく

ていいもんねっ!!

で、でもですね……

やっぱり緊張しちゃって、 ついつい手がさっき買っておいたアイスティーのカップにばかり伸び

るのですよ。あー、

は つ !! でも待てよ……!! このペースでぐいぐい飲んで、 途中でトイレに行きたくなった

ちゃうよね。 想像して、私はおず……とカップを戻す。映画の途中で席を立つとか、「ああ、 恥ずかしい!! なんか嫌だ!! 途中で席立つの恥ずかしい!! イレか」ってわか つ

………。の、飲むのはちょっとずつにしよう……。 うん。

そしてこれまたついつい、間を持たせようと手が伸びてしまうのがポップコー

二人で食べましょうって、Lサイズを買っておいたのだ。溶かしバターたっぷりのやつ。

映画の楽しみの一つだよねえ……。バターたっぷりのポップコーン。

……って、はっ!! あんまりがっついたら、「こいつどんだけ食うの」とか思わ

それに、 ………ちょ、ちょっとずつ!! ちょっとずつ食べよう!! き、気になるかなやっぱり……。映画の最中に隣でボリボリボリボリ。

あんまり音を立てないように、 口の中で溶かして呑み込めばいいよね!

······と、 いうか……)

本編始まる前から、すでに疲労困憊ですよ私……。はぁ……

よう、 ため息をアイスティーで呑み込み 選んだのは、テレビでも話題の洋画。ちなみにラブストーリーじゃなく、 モシ……っ、モシ……っと舌で溶かすように食べているうちに、 (ああまた飲んじゃった……)、ポップコーンを音を立てない 映画の本編が始まった。 ヒューマンストーリー

デートならラブストーリー選べよ! と思うなかれ

だって気まずいでしょうがぁあああ! 洋画のラブストーリー は高確率でエロシーンが入るんだ

目の前で濃厚なラブシーンとか、気まずいわああああ!

く語り過ぎて引かれる自信があった。 ちなみに、アクションは……私あんまり見ないし。 時代物……も観たかったけど、 観たあとに熱

アニメは論外!!(本当は一番見たかったけど)

無難な感動系ヒューマンストーリーにしたんだけど、外れじゃないとい いなあ……。 前評判

そこそこ……って、 お !?

こ、この声……!!

あの声優さん……っ?! うわ、 うわ、ちょっと、一気にテンション上がったんだけど=

大好きな声優さんが、予想外にも吹き替えをやっていて……

この映画にして良かった!! 吹き替え版にして良かった!!

ああ……良い声だなあ……

うっとりしながら聞き惚れているうちに、 ストーリーにも引き込まれてい 、った。

これ……。 普通に面白い……!!

じーっと画面に見入りながら、 私は無意識のうちにポップコーンに手を伸ばした。 すると

「「あっ」」

ちょうど柏木さんもポップコーンに手を伸ばしてて、 指が触れ合ってしまった。

画面から視線を外して、思わず隣の柏木さんを見ると……

すみませんって、視線で謝られて。

ほ、微笑まれた……!!

「……っ!!」

触れた指先が、あ、熱い!!

というか、あの、こいつ指先ベタベタしてる、 ポップコーン食べ過ぎって、 思われてないかな!?

うわ、うわあああああ!!

何だかバツが悪くて、私はさっとスクリーンに視線を戻した。

し、心臓が……

心臓が、バクバクするよおおおおお!

柏木さんの指に触れた、私の指先。

バターの油が気になるから、できればハンカチで拭いてしまいたい……っ。

だけど、柏木さんの指に触れた直後にハンカチで拭くとか、感じ悪いよねッ?

結局私はバターで汚れた指を、 自分の膝の上で持て余してしまう。

(な……なんだこれ……。なんだよ……もう……)

乙女ゲームとかで、 二次元男子に当たり前のように感じていたトキメキ。

だけど、三次元男子を前にすると、こんなにも……

(……つ)

こんなにも、些細なことで……

どうしていいか、わからなくなる。

心の動揺を振り払うように、映画に集中した。

そうしたら、クライマックスで大泣きに泣いて。(こ、 声は我慢した……ッ!

私は一つ、学んだのです。

デートで号泣モノの映画は、マズイ‼

気合いを入れた化粧が、ぐっちゃぐちゃになる……=

映画のエンドロールの途中、まだ暗い場内も顧みず私はトイレに向かった。

恥ずかしかったけど、背に腹はかえられない。

明るくなって、柏木さんに顔を見られる前に……

な、なんとかしないとっ、この化粧……っ!!

急いでお化粧を直して、 映画館を出たあとは二人で近くのカフェに入ってお茶をしました。

そのとき、「またメールしても良いですか?」って言われて、あまりにもびっくりしたから、 お見合いのときよりは、 話せた……かな、と思う。(映画の感想とか、お互いのこと……とか) 飲

んでいたメロンソーダがゴフッって気管に入っちゃって……

涙目になりながら、頷きました。

46

これが私達の、初デート。

## これが恋というものか

「へえー! 柏木さんって、弓道部だったんですね!!」

日曜日のお昼時。

私は柏木さんと、イタリアンレストランでランチ中である。

一応、デ、デートです……。たぶん!!

食べに行ったり、 柏木さんとは、 映画を観に行ったりするようになった。はっきり「付き合う」ってことになって 一日に数回メールのやりとりをして、土曜日や日曜日に、こうして一緒にご飯を

いるわけじゃないけど、お見合いを経ての、この状況ではあるし……

なんというかこう……知り合い以上恋人未満……? な関係だ。

まあ、まだお互い知らないことも多いし……。『友達以上』とはいえないな。

そんなこんなで、ちょうどいま話題に上っているのがお互いの部活経験である。

弓を構えるときの、凛々しい立ち姿……。似合う!! 柏木さん、元弓道部ですってよ! いいよねえ弓道部……。 あのカッコいい道着。

……あれですよね。放課後の弓道場で

一人残って練習を続ける柏木さんを、

熱い眼差しで見つめる後輩(男)とか!

47 これが恋というものか

ひとしきり矢を放って、ふうと息を吐いて弓を下ろし。

額に滴る汗を拭おうしたところで、さっと差し出されるタオル。

うのですよ、 見れば、後輩(男)が顔を真っ赤にして、『……つ、使って下さい……』とか、震える声で言っちゃ ふふつ。

その後輩(男)の好意に、前々から気付いていた柏木さん。

て自分の汗を拭い…… そして彼は、自分を一途に慕ってくる可愛い後輩 (男) に微笑んで……。 無言でタオルを受け つ

被せるように返して、弓道場を出ていく……と。 すれ違いざま、 後輩(男)の肩をぽん……と、 叩いて。 彼の頭の上に借りたタオルをぽすっと、

残った後輩 (男) は、 ぎゅっと、 宝物みたいにそのタオルを抱きしめて…

『……柏木先輩……』

――とか、呟いちゃったりしてね! きゃあああ!!

良いよね、 運動部で先輩×後輩とか! 後輩×先輩も萌えるけど、 柏木さんと後輩 男 の場合

だとやっぱり柏木さんが攻めだわ……

メン黒髪眼鏡の弓道着姿‼ 見たい……。見たいなあ……そんな素敵な弓道部! できれば後輩 男 とのツーショットとかー 写真があるならぜひ拝見したいです、

「……峰岸さんは、何部だったんですか?」

えつ?私ですか?

私はですね~、中学高校と万年文化部ですよ~。

「美術部です。といっても、絵は上手くないんですけどね……」

らなあ。美術部と文芸部はオタク率高いですよ。 てましたよ。 たはは。 なにせ、 部活ではもっぱら同志(オタク仲間) 美術室で絵も描かずにイラストとか漫画とか描 達とオタクトークで盛り上がっていたか

そんな黒歴史は、柏木さんには語れないけれども……

「でも、部活で美術館に行ったりするのは好きでしたね」

これは嘘じゃない。部活のみんなと、 顧問が運転するマイクロバスで他県の美術館に行ったりし

たなあ。 (そのレポートを毎回書かなきゃいけないのは面倒だったけど……)

「……どんな絵がお好きなんですか?」

「そうですね~。 私は抽象画よりも、写実的な絵の方が好きですね……。 油絵の、 風景画とかが

**徴好きです。外国の田舎の風景、とか……」** 

見ていてこう……気持ちが穏やかになれるというか。

ずっと見ていたくなるというか。

「……それじゃあ、 このあと一緒に行ってみませんか? 美術館」

「えっ」

「この近くに、小さな美術館があるんですよ。もし、 よかったら」

断る理由なんてありませんよー

「はい!ぜひ、ご一緒させてください」

50

おおお……。美術館で、デ、デートとか……

なんか大人な感じだなあ……

な洋館風の建物だった。 柏木さんに案内されてやって来た美術館は、 ビルとビルの間の小道を抜けたところにある、 小さ

ビルが立ち並ぶエリアに、まるでオアシスのように出現した緑の空間

そこに佇む、小さな美術館。なんか素敵な雰囲気……

年季を感じさせる石畳を歩いて、中へ。

て微笑んで、でもその『次』に出させてもらえたことなど一度もない。 受付では、 いつもの食事のときもそう。そして、「悪いです」って言う私に、 私がお財布を出すより先に、 柏木さんがすっと二人分の入館料を払ってくれ 「じゃあ次、 本当に申し訳ないで 払って下さい」っ

「……へえ……」

す....!!

今度こそ柏木さんより早くお支払いをするぞ……っ!!

たとか。 受付のお姉さんがくれたパンフレットによると、この建物は元々、ある華族のお屋敷だったんだっ そして、お屋敷を美術館に改装して、それまで収集してきた絵画や美術品を公開するようになっ

大きな美術館のように、 有名な画家の有名な作品があるわけではなかったけど。 レトロな洋風の

放牧する、イギリスの田舎の風景画に、 室内に飾られた、 天使のブロンズ像とか、 私はまじまじと見入ってしまった。 壁に飾られた、綺麗な牡丹の花を描いた日本画や、

これ、 …丁子)を長い、この好きな物を雑多に集めました! な感じ、好きだなあ……

それに、美術館の静寂が好き。

作品と一対一で向き合うこの時間の静けさが、好きだ。

を覚える。 この静寂の中で風景画をじいっと見つめていると、自分がその風景の中に入っていくような感覚

柏木さんと私。 ……いつか、この風景画に描かれているような景色を、 それぞれが自分のペースで館内を見て回った。 実際にこの目で見てみたいなあ……

時折、同じ作品の前で長く立ち止まったりして。

ふいに、 、 隣に並ぶ柏木さんの端整なお顔を見上げると、 私の視線に気づいた柏木さんが、 口元に

微笑を浮かべてくれて。

……うわ。うわわ……

..... つ 」

柏木さんに微笑まれると、胸がきゅうーってなる。

なんだろう、これ……。二次元に感じるときめきと、 似ているようで、 ちょっとだけ違う。

51

このときめきが、こ、恋って……奴なのですか……!!

これが恋というものか

美術館を出て、 私達は近くにある小さなカフェに立ち寄った。

思っていたより美術館に長居してしまったので、少し小腹も空いている。

私はアイスカフェラテと、本日のおすすめケーキを注文した。(レアチーズケーキだって! 大

ちなみに柏木さんは、 ホットコーヒーを注文。

飲み物とケーキが運ばれてくるまでの間、私達はただ静かに向かい ・合って、 座る。

目の前に座る柏木さんは、 口元に穏やかな微笑を浮かべていた。

う……うううう……

柏木さんに微笑まれると、動悸息切れがする。

これが恋ってやつなんだろうと、

もうね……。私の心臓、満身創痍ですよ。

柏木さんの何気ない仕草に、 萌え……じゃない!! と ときめいて…… (あれ? 似たようなも

だから、メールのやり取りだって毎回ドキドキしちゃうし、 これまでだって何度ハートを打ち抜かれたことか……

今日みたいな、

デ、

デートなんかも

のかしら……?)

緊張しつぱなし……ですよ。

不思議と: ····落ち着いた気持ちになれたりもする。

たとえば、二人で同じ絵を見つめているとき。

たとえば、二人で他愛無い会話をしたときにふっと訪れる、 少しの沈黙だったり。

こうして静かに向かい合っている、 いまの時間だってそうだ。

一緒にいてすごく居心地が良いと感じる時間が、ますます増えた気がする。

そして、 その居心地の良さに浸っていると、不意打ちのように…

心臓を打ち抜かれちゃうくらいのときめきを与えられることもあって。

(さっきの微笑とかね)

.....認めよう。

私は柏木正宗さんという一人の現実の男性に。

好意を……抱いている。

恥ずかしながら、 初めて……

男性を、 好きになりました。 (三次元の、 という意味で)

お見合いで知り合った、

何度も会って、食事をして、話をして。

知り合い以上恋人未満の私達。

柏木さんは、 私のことどう思っているのかな……?

嫌われてはいないと思う……けど。

·....さん。

……しさん?

……峰岸さん?」

53

52 これが恋というものか

「ふあっ!」

思わず思考にふけってしまって、呼びかけられていることに気付かなかっ

しかも、 私達の前にはすでに注文していた飲み物とケーキが並んでいる。

店員さんが来たのにも気付かないとか……!!

どんだけトリップしていたんだ、私!

「……す、すみません、ぼうっとしてしまって……」

私はごまかすように、グラスのストローを口に咥える。

冷たいアイスカフェラテが、喉を潤してくれた。

ああ……甘くて美味しいなぁ……

-.....峰岸さん」

「はい」

柏木さんが、私の名を呼ぶ。

ストローから口を離して彼を見ると、どこか真剣な眼差しで私を見つめていた。

「……思えば、ちゃんと口にして言ったことはなかったですよね……」

ん? 何を……

何か言いたいことがおあり……

|峰岸千鶴さん。 俺と、 結婚を前提に付き合っていただけませんか……?」

え……えええええええええええええええええええええ

て、そりゃ確かに、私達の関係ってなんなんだろうなーって。

一応お見合いを経てのデートであるから、 まあ結婚を意識しての……恋人… ·未満? かな?

とか思ってたけどさ。

あ 改めて……そんな……そんな真剣な顔で言ってもらえると……

ううううう嬉しいやら恥ずかしいやらびっくりやらで、 あの……心臓が:

心臓が破壊され……ただけじゃ済まず、その傷だらけぼろっぼろの心臓が口からポ ンって!

ボーンって飛び出していきそうな勢いなんですけど!!

「……返事を聞いてもいいですか……?」

へ、返事って……。それは……そら……

「………はい! あ、あの、う、嬉しいです……」

私はどうにかこうにかそれだけを口にして、 コクコクと首を縦に振った。

ど、どうしよう……

付き合って下さいって、言ってくれた柏木さんの声

録音して永久保存したいくらい嬉しいよおおおお。

(でも聞くたびに悶えてごろんばたん!

て な !! ?

これが恋というものか

### 立ち読みサンプルはここまで

57

そうだけど……) さっき飲んだアイスカフェラテ、鼻から目から噴きそうだ。 あうううう、いろんな物が逆流しそうだ。

透明なアイスカフェラテ、目から滲んできそうだ……

「……良かった」

ほっと、胸を撫で下ろす柏木さん。

「……千鶴さん、と」 彼はさらに、言った。

「え……っ」

「千鶴さん、 **……うっく!!** と呼んでも良いですか……?」

····・は、はい····・。 低音ボイスで名前呼び……とか。 なんて破壊力!! あの、

じゃあ私も……」

ああ……。柏木さんが何か嬉しそうな顔で微笑んでいらっしゃる。

「……はい」

ひええ、 なんてイケメン。

本当に、 本当に良いんですか、 私で.....

「はい……。ありがとうございます。千鶴、さん」 ただ名前を呼ぶだけなのに、なんでこんなに……どきどきするんだ……つ。 私達は正式に、『恋人同士』って関係になったのでした。 初めてお互いを名前で呼び合うようになった日。

そうして、

「ま、正宗……さん」

ふああああ恥ずかしい!!

56 これが恋というものか